

主 題：礼拝の情景

聖書箇所：黙示録 4－5章

ナイジェル・シェイラー師（近藤牧師より紹介）

先週の木曜日から三日間に渡って私たちは「終末について」の学びをしました。神はどのようなことを約束し、どのようなことを警告し、そして、救われていることがどんなに素晴らしいことなのか、そのことを学んで来ました。そのような機会をくださった神に私たちは心から感謝をするのですが、そのご奉仕のために遠くニュージーランドから喜んで来てくださったシェイラー先生に感謝しますとともに、先生を送り出してくださった大学の方にも感謝をしたいと思います。昨日もビデオを見せていただきましたが、美しい国の美しいところに建てられた大学において、もちろん、そこに教会があるのですが、そこですばらしいみわがが為されています。それは神のみことばを正しく伝えること、また、神のみことばを正しく伝える人々を訓練していることです。私たちのパートナーであり、国が違ってもともに同じ働きをしているシェパーズ・バイブル・カレッジの責任者の一人であるナイジェル・シェイラー先生をこの講壇にお招きすることを本当に感謝しています。今日は、今回セミナーで学んだ黙示録の4章と5章から「礼拝の情景」というタイトルでメッセージをいただきます。拍手をもって先生をお迎えしましょう。

《メッセージ：礼拝の情景》

皆さんと今日、こうしていっしょにいることを喜びと思っています。私の教会から、また、シェパーズ・バイブル・カレッジからも挨拶を送ります。私たちが日本にいる間のことを私の同僚たちが祈ってくれています。ここでの働きをみなよく知っていてくれて、その働きが神に祝されることを祈ってくれています。神がどんなに素晴らしい働きをここでしてくださっているのかを、私たちがニュージーランドに戻って彼らに報告できることを楽しみにしています。この三日間に私たちが学んだことに関しても私は大きな感動を覚えています。私たちが終末に関して学んだことは、私たちにとって非常に有益なことであつたと思っています。私が今日ここでしたいことは、この黙示録をもう一度見ることです。特に、今日は「公的な礼拝」ということを考えたいと思います。この箇所（黙示録4章、5章）のみことばには公同の礼拝に関する四つの主要な特徴が形に現わされています。もし、私たちが真の礼拝者となるのであれば、地上において、これらの天での礼拝の特色が現わされていなければなりません。

☆公的な礼拝 → 本当の礼拝とは？

私たちは質問をもって礼拝を進めて行きたいと思いますが、皆さんがだれかに「公的な礼拝とはどういうものですか？」という質問を受けたとき、一番初めに何が頭に浮かびますか？たとえば、だれかにいっしょに礼拝しましょうと言われたなら、皆さんの頭にはどのようなことが想像できるでしょう？ある人たちは賛美をすることが礼拝だと思うかもしれませんが。それは正しいことでしょう。また、もしかすると聖餐式をすることが礼拝の行為だと言うかもしれません。それも正しいことでしょう。また、献金をささげるという、そのようにささげものをするのも礼拝の行為だと言うかもしれません。また、語られるみことばを聞くことも礼拝の行為だと言うでしょう。また、神に奉仕することも礼拝の行為だと言うかもしれません。また、別の人たちは祈ることが礼拝の行為だと言うかもしれません。事実、これらすべての事柄は礼拝の行為です。けれども、私たちが考えておかなければいけないことは、これらの行為をすべて行なっているにもかかわらず礼拝をしていない可能性があるということです。私たちはそのことを経験上知っているのではないのでしょうか？私たちが自分自身に正直になるなら、皆さんはいつかの日曜日この教会にやって来て、礼拝の行為だけをしているときがあるかもしれません。賛美をし聖餐式にあずかることがあつたかもしれません。また、祈りを聞き、みことばの解き明かしを聞いているときがあるかもしれませんが、家に帰ってふとその日の朝のことを考えて、自分は礼拝していたのだろうかと思ひ悩んでしまうことがあるかもしれません。なぜなら、私たちの思いがまったく別のところにあつたり、礼拝に来ていながら他のことを考えていることがあるかもしれないからです。ですから、単に教会に来ることが礼拝をすることではなく、心の問題であるということを私たちは知っています。私は現在のクリスチャンたちがもっている礼拝の概念は非常に限定的なものであると思います。西欧のクリスチャンたち、また、この日本でも同じだと思いますが、多くのクリスチャンたちは歌うこと、賛美をすることが礼拝であると考えています。たとえば、ウォーシップソングのようなものがたくさんCDになって出ています。それゆえに、賛美をすることが礼拝であると考え人たちが増えて来ているのです。

皆さんに、少しこの話をさせてください。あるレストランが町にあります。そのレストランではき

ちんとした食事がいっさい作られていません。そして、来るお客さんにいっさい食事が提供されないのです。非常に多忙なレストランなのです。そのレストランになぜお客さんが集まるかという、そのメニューがとてすばらしいからです。そこで働くシェフたちはこのメニューをどのようにしてお客さんに見せるかということに関して、すばらしい技術をもっています。彼らはそのレストランが繁盛しているかどうかというその基準となることは、お客さんに喜んでもらうためにそのメニューをどのように見せるかということに懸っていると考えなのです。ですから、シェフたちはいつも議論をし合って、メニューの色は何色であるべきかとか、内容はどのようなものであるべきかと言い合っています。また、彼らはメニューに書かれるフォントがどんなものであるべきかということについてまで議論するのです。彼らは度々そのメニューの写真や絵柄を入れ替えて、新しいものに変え続けています。ですから、その結果、メニューはいつも現代的ですばらしいものができているのです。そして、集まって来るお客さんもここに来て実際に食事がまったく運ばれてこないことに関して、何も文句を言わないのです。そして、彼らはレストランにやって来てメニューを眺めることに満足を見出しているのです。あるときは、お客さんがそのメニューを見て、もう少しこのように変えたらどうですか？とお店の人に言うのです。そして、シェフたちはその意見を聞いて、また、議論をし合ってそのメニューに新しいことを加えて行くのです。お客さんたちはときに彼らが考えているすばらしいメニューはこのようなものだと言ったとシェフたちと議論し合うのです。シェフたちはそこでメニューを一から作り直そうと言って、新しいメニューを作るのです。また、新しい飾りや新しいスタイルのメニューが誕生して行くのです。新しい色、新しいフォント、新しいスタイルと完全に新しいメニューが生まれるのです。けれども、その間、そのレストランではいっさい食事の準備がされず、いっさい食事が提供されないのです。けれども、そのことについてだれも文句を言いません。なぜなら、お客さんが満足してさえいればそれでよしとしているからです。そして、最終的に、お客さんたちも働いている人たちもみなそのメニューが大好きになるのです。メニューが彼らを満足させるのです。メニューが彼らの興味を引いているのです。そして、人々はそのメニューのために争うのです。本当の食事は彼らに満足を与えないのです。もし、そのレストランがすばらしいメニューを提供しなければ、お客さんは他のすばらしいメニューを提供するレストランに移って行きます。

今のこの話が、残念なことに現代の教会の姿を表わすものではないかと思います。なぜなら、私が様々な教会に行き、いろいろな国の教会を見るとき、多くの教会がその礼拝のスタイルにこだわりをもち、表面的な事柄に興味をもっているからです。そして、その教会がどのようなものであるのかということ、音楽のスタイルやメッセージのスタイルによって評価しようとするのです。それゆえに、内容をもって評価しようとはなかなかしないのです。私が皆さんにお聞きしたいことは、いったいどうすれば外面的な礼拝の概念を取り除いて行くことができるかということです。教会にやって来る人たち、また、教会の中にいる人たちでさえ、外面的なスタイルに焦点を当てている中であって、私たちはどのようにして神に焦点を当てることができるのかということです。私たちはそのことを天で行なわれている礼拝に目を向けることによって為すことができるのではないかと思います。神を礼拝する天での礼拝の姿を私たちがしっかり学び、それを真似ることによって、私たちはこの地上においても正しい礼拝をもつことができます。それをするために私たちは黙示録を開かなければなりません。

今日見て行く4章、5章に入る前に、この黙示録がどういう本なのかをがいっしょに考えたいと思います。セミナーに来られた方には復習になります。

A. 黙示録について

1：1で見るように、イエス・キリストの黙示、啓示がヨハネに与えられました。この「黙示」とはギリシャ語で「アポカルフィス」ということばです。これは「おおいを取り除く」という意味です。つまり、黙示録はイエス・キリストに掛かっているおおいをすべて取り除くことを言います。そして、9節ではヨハネがパトモス島にいたことが記されています。彼は福音を宣べ伝えていたゆえに、この島に幽閉されていたのです。10－12節「私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。：11 その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」：12 そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。」、日曜日にヨハネは祈っていました。そのときに、彼は神から啓示をいただいたのです。この1章でヨハネが見た啓示について話をしています。これが彼が受けた最初の啓示でした。2－3章で彼は七つの教会に対する手紙を記しています。4章で私たちはヨハネへの2番目の啓示を見ます。4：1にはヨハネの前に門が開いたことが記されています。そして、神に招かれてヨハネは未来に起こる事柄を見るようにと言われます。私たちはヨハネがどこかに連れて行かれたのかどうかは分かりませんが、間違いないことは、ヨハネは何かすばらしい啓示を見たのです。ヨハネは時間と空間を超えた窓のようなものがそこに開いて、そこから幻を見ることができたのです。4章と5章にその幻が記されています。本来なら、この4－5章を読む

のですが、時間の都合上、見ながら読んで行きましょう。

4－5章を見ると皆さんに気付いていただきたいことは、公的な礼拝をするに当って、四つの重要な特徴があるということです。この地上において、同じように共有されなければならない天における礼拝の特徴です。もし、私たちがこの天において見られる礼拝の四つの特徴をこの地上においてもつことができるなら、私たちは正しい礼拝者として神の前に立つことができるのです。最もしたくないことは、礼拝のスタイルに焦点を当てることです。

B. 公的な礼拝の四つの特徴

1. 礼拝の対象

ここで私たちが見たいことはいったいだれが礼拝を受けているのか、どのようなすばらしい方が礼拝を受けているのかということです。ヨハネは真の礼拝者はだれを礼拝するのかということを確かに理解しています。4－5章で二人の方が礼拝を受けています。一番目は王座に座っておられる方です。2番目は小羊です。

1) 王座に座っておられる方＝神

最初に「王座に座っておられる方」を見てみましょう。4：2－3「**たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、^{：3} その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。**」、ここに出て来る「碧玉や赤めのう」という石は私たちが今日目にする石とは違うものです。事実、黙示録2章1章にこれと同じ表現が出て来ますが、そこではこれらの石が水晶のように透き通っているとあります。この「赤めのう」というのはルビーのような血のように赤い色をした石です。この御座に着いておられる方はダイヤモンドのように光り輝く方であり、赤い光を帯びておられます。そして、光輝いているゆえに多くの色を周りに導き出しています。ここでは「赤めのうのように」と濃い赤の色が強調されています。これはこの後地上に向けられる「怒り」を表わしているのかもしれませんが。そして、3節にあるように「**緑玉のように見える虹があった。**」、エメラルドのような虹が輝いていると言います。私たちは虹を見ますが、これは私たちが知っている虹とは違います。このヨハネが見た虹は御座の周りに円を描いている虹なのです。また、この虹は私たちが知っている七色ではありません。エメラルドのような緑色をしているのです。この御座を取り囲んでいる天空をすべて満たすようなものです。そして、この虹の光がすべてを満たして、真ん中にいる御座に座っている方の光を大きく現わすのです。5節を見ると「**御座からいなくとも声と雷鳴が起こった。**」と記されています。この「**いなくとも**」が私たちが知っているような「いなくとも」として御座から出ているのかどうか分かりません。まっすぐ突き進んでいるものか、それとも御座からいろいろな方向へと散って行くものか、私たちにはよく分かりません。けれども、この「**いなくとも**」がどんなものであったとしても、ここで見る姿は非常に恐ろしい光景だったのです。単に、これが見た目に恐ろしいものだけでなく、音においてもそうでした。1節にあるように大きな声が出されています。そして、「**雷鳴が起こった。**」とあります。私たちはこの御座に無限の神が座っておられ、そこから偉大な力が考えることができないような光として輝き出ていることを見ます。ここで記されていることは、神こそがあらゆるものの支配者であるということを強調している表現です。彼は王の中の王であり、彼は主の中の主です。彼は天の御座からすべてを治めておられ、この方を治める者などだれも存在しません。皆さんに対して質問することはこのことです。皆さんが今日こうして礼拝するときこの神が皆さんのあたまにあったでしょうか？この神はイスラエルの民がシナイ山で礼拝した神です。イスラエルの民がシナイ山に集まったときに、彼らはシナイ山の上に雷の音とともに見た神を恐れ、その中で礼拝しました。この神はイザヤが天に上げられたときに礼拝した神です。また、この神はエゼキエルが見た天での幻の中で礼拝した方です。けれども、残念なことに、この神こそ今日の教会が忘れてしまった神です。人々は神は優しく接してくださる方だと考えています。そして、彼らは神は愛に満ちた方だということだけを強調して表現します。確かに、神は心優しく私たちに接して下さって、愛に満ちた方です。けれども、私たちは神が恐ろしいほどに偉大な方であることを決して忘れてはいけません。この方はご自身の偉大なる力をもってこの全世界を統べ治め、そして、さばかれる方です。

2) 小羊＝イエス・キリスト

ある人たちはイエスはそのような方ではない、イエス・キリストは神とは違う姿をしていると言いますが、1：12を思い起こしてください。ヨハネが最初に見た幻です。1：12－13には「**そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。^{：13} それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。**」、「人の子のような方」とはイエス・キリストのことです。その方は「**足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めて**」おられます。14節には「**その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。**」とあります。驚くべきキリストの姿です。私たちと同じような背格好をした方が、真っ白に輝き目は燃

える炎のようだと言います。15節には「その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。」と、まるで、ナイヤガラ滝に立っているように、イエスの声は「大水の音のよう」だと言います。16節には「右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。」とあります。もし、この方がイエス・キリストなら、私たちはこの方に畏怖の念をもって現われなければなりません。イエス・キリストの前に恐れと驚きをもってひれ伏すのです。この方はひと言で私たちを滅ぼすことができるお方です。皆さん、先ほど「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、…」と賛美しましたが、今朝、どのような神を思って礼拝に来られましたか？私たちが神をどのように捉えるかが、私たちがこの人生をどのように生きるかに掛かっているのです。

これら二人の方が私たちが礼拝する対象です。御座に座っておられる神と、私たちの前にすばらしい栄光をもって現われるイエス・キリストを礼拝するのです。

2. 礼拝の参加者

次に、礼拝の参加者、だれが礼拝するのか？ということを見ましょう。4－5章には五つの賛美が為されています。この五つの賛美を見ると、最初の二つは「御座に座っておられる神」にささげられています。次の二つの賛美が小羊に向けられています。そして、最後の賛美は両方に向けて為されています。さらに、これらの賛美はだんだんとその範囲が広がって行きます。

1) 四つの生き物

4：6に第一の賛美者たちが出て来ます。4：6「御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。」、ヨハネはここで「四つの生き物」について説明をしています。これらは常に神を礼拝し続ける生き物です。彼らは「前もうしろも目で満ちて」いる、どんなことが起こっているのかよく分かっていると言います。7節では「第一の生き物は、ししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようであった。」とあり、これら四つの生き物にはそれぞれ六つの翼がありました。そして、昼も夜も絶え間なく神を賛美し続けているのです。でも、皆さんにここでよく覚えておいていただきたいことは、最初に出て来るこの賛美を歌っているのは四人であるということです。この四つの生き物というのが、イザヤ書6章に記されているセラフィムに似ています。彼らは天の御座の上をまるで霊的なヘリコプターであるかのように飛び続けているのです。神を賛美する歌を歌い続けながら御座の周りを飛び交っているのです。

2) 24人の長老

9－10節にこのようにあります。「また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、：10 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。」、そして、11節に彼らの賛美を記録しています。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」、時間があればこの24人の長老がだれなのかを具体的に示すことができるのですが、簡単に説明するなら、これは今までに救われたすべての信徒たちの代表だと言えます。けれども、ここで皆さんに気付いていただきたいことは、最初の歌は四つの生き物が歌っていて、ここでは24人が歌っているということです。

3) 28人

三番目の歌は28人が歌っています。5：8を見てください。「彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっばいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。」、ここには四つの生き物と24人の長老がいますから、合わせて28人なのです。つまり、賛美をする人の数が増えているのです。これだけで留まりません。

4) 多くの御使いたち

5：11を見てください。「また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。」と。つまり、ここで賛美をささげている者たちの数は「万の幾万倍、千の幾千倍」なのです。これはギリシャ語ではもう数え切れないほどの数を表わそうとするときに表示することばです。余りにも多くの天使たちがこの四番目の歌を歌っているのです。ヨハネはもうその数が言えないと言うのです。思い出してください。最初の歌は4人でした。二番目は24人、三番目は28人でした。そして、四番目はヨハネが数え切れないほどの多くの天使たちによって為されていました。けれども、この賛美者の数はもっともっと増えて行きます。

5) あらゆる造られたものたち

五番目の賛美は私たちが信じられないほどの数によって為されています。13節にはこのように書かれています。「また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物が

こう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」、これは神に対するすばらしい賛美のときです。ここで言われていることは、最終的にあらゆるものが礼拝をささげるといことです。神はねたみ深い方です。ありとあらゆる被造物によって礼拝をされる方です。そこには何か引き止めるものはありません。だれ一人として「どうして神が礼拝されなければいけないのか？」と疑問をもつ者はいないのです。神はあらゆる者によって栄光を受けるのです。ですから、私たちは最終的にそのようになるなら今から始めるべきだと思いませんか？ありとあらゆる被造物が神を礼拝するということはまさに正しい真実なことです。ですから、私たちが今日このように礼拝に来ていることは、私たちが永遠にし続けることなのです。

3. 礼拝のことば

3番目に「礼拝のことば」を見ましょう。いったい、この礼拝者たちは何を言っているのでしょうか？その礼拝の思いをどのようにことばにして表わしているのでしょうか？

1) **4 : 8** 神は完全に聖い方

「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。」と私たちは今朝この賛美を歌いました。これを神学者たちは「三つの聖の宣言」と言います。皆さんが神の最もすばらしい属性を知りたかったら、ここに書いてあります。神は聖い方です。神は私たちとは完全に違う方です。罪から完全に離れた方です。神のうちには全く不純がありません。完全に聖い方です。私はニュージーランドである時一人のクリスチャンのところを訪問しました。教会の長老たちが彼の教えている教えに対して疑問をもっていたので、私に彼を訪ねるようにとお願いされたのです。私の牧師先生と私とで訪ねました。この人はこのように言いました。「地獄は一時的なさばきの場所である、最終的には未信者であってもすべての人たちが天に行くことができる」と。私たちは彼に何に基づいてそのような教えをするのですかと聞きました。彼の答えは「神の最も偉大な属性は愛である、愛に満ちた偉大な愛の神がだれかを地獄に永遠に送ることなどできない」というものでした。彼が持っていた見解の間違ひは、確かに神は愛に満ちた方であり、恵み深くあわれみ深い方ですが、それ以上に、神は聖い方です。つまり、神はみことばによって一度も「愛ある方、愛ある方、愛ある方」とは言われていません。また、「恵み深い方、恵み深い方、恵み深い方」という賛美もありません。聖書の中に「神がどのような方か」というタイトルとして三つ並べられているものは「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。」しかありません。ですから、私たちが礼拝するとき、私たちはこの神が罪を憎む聖い方であることを覚えなければいけません。

時間がないので、この後の四つの歌がどの方に向けられているのかを見て行きましょう。

2) **4 : 11** 焦点は神ご自身

「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」、この焦点は神ご自身です。

3) **5 : 9-10** 礼拝の対象は神

「彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、**10 私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。**」、ここで見ることができるようにこの礼拝は私たちにいっさい焦点が向けられません。礼拝の対象は神でしかないのです。

4) **5 : 12** 焦点はほふられた小羊

「彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」、これは天使たちが神に向かって賛美を歌っているのですが、彼らは自分たちのことはいっさい歌っていません。彼らの焦点は小羊です。

5) **5 : 13** 焦点は御座にすわる方と小羊

「また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」、焦点を見てください。神以外にありません。四つの生き物のだれも24人の長老のだれも、天使たちのだれも被造物の何ものも、自分たちに目を向けようとはしないのです。彼らは神の圧倒的な聖さの中にあって、自分たちのことをいっさい忘れてしまうのです。

私が最近気付くことですが、近年書かれているクリスチャンの賛美の多くのものは、神に目を向けているのではなく、私たちに目を向けています。つまり、私たちの賛美が神を中心にしたものから、私たちを中心としたものへと変わって来ているのです。昔、カリー・サイモンというアメリカ人の歌手が歌った歌があります。いわゆる世的な歌ですが、その歌のタイトルは「あなたはなんとむなしいのか」というものです。ときどき私は「あなたはなんとむなしいのか」という歌を神が私たちにに向かって歌って

もおかしくないと思います。なぜなら、その歌詞はこのように書かれているからです。「あなたはなんとむなしいのか、それはあなたがこの歌をあなた自身のことを歌っていると思うから」と。私たちが礼拝をするその行為が多くの場合、私たち自身のことを考えて行なっているということです。ですから、私たちは礼拝のスタイルに心を向けます。どんな楽器がそこで演奏されるのか、どんなスタイルの歌が歌われるのか、古くからある賛美か、それとも新しい賛美か、私たちはそのような事柄で言い合います。そうすることによって礼拝の行為が私たちが何を好んでいるのかということになってしまっていて、神が何を望んでおられるのかということから離れて行きます。けれども、これは天で起こっていることではありません。天で礼拝する者はだれ一人として自分たちに目を向けることをしません。彼らは神を礼拝することだけしか目を向けません。

4. 礼拝の態度

礼拝している人の姿を見ましょう。4：10「二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。」、24人の長老たちは礼拝するために御座の前にひれ伏しています。5：8を見てください。「**彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっばいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。**」、ここでも24人の長老たちは「**小羊の前にひれ伏し**」ています。そして、5：14を見てください。「**また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。**」、ここでも「**長老たちはひれ伏して拝ん**」でいます。この聖書全体を通して、だれかが神にお会いしたときに起こることはみな同じです。彼らは地に倒れて恐れおののき震えるのです。彼らは地に顔を着けて神が何かをお語りになるのを待つのです。イザヤが神を見たとき「私はのろわれるべき存在だ」と言いました。湖が嵐になったとき、弟子たちは恐れましたが、嵐を静められたイエス・キリストに対して彼らはもっと恐れしました。私たちはこの地上において礼拝するとき、聖い神との親しさを間違った形でもっています。私たちは神に対して非常に馴れ親しんでしまっていて、真剣な態度で接することを忘れてしまっています。神を礼拝するに当って、私たちは神を神としてというよりも、むしろ、親しい友人であるかのように礼拝しています。正しい礼拝をささげること、黙示録4－5章がその模範を私たちに教えます。

皆さんはこの浜寺聖書教会がどのようなレストランでありたいと思いますか？願わくは、この教会が人々が集まって来て、その栄光に満ちたスタイルに関心を抱く教会でないように願います。私の心からの祈りは、この教会が礼拝の内容に目を向けることです。だれを礼拝すべきなのか、そして、この礼拝の行為の中で自分をいっさい無視し、この時間に起こるあらゆることが自分のこととはまったく無関係で、神のことだけであるように、そのように祈ります。